

『吉岡の日記』を読む

—文化元年十月五日～十九日—

【指導教員】

岸本 覚 久保 堅一

【学 生】

上垣 佑真 木村 凌 才本 智也 佐々木大佑 佐貫 綾香

新谷 陽香 副島 優花 武内 大和 寺本 真樹 徳久 七映

富川 健吉 藤田 東子 宮崎 有生 森 誠

一、はじめに

私たちは、鷺見休明（すみ やすあきら）著『吉岡の日記』の翻刻や内容の読解、実地調査、吉岡温泉の歴史に関する調査などを行った。この活動の目的は、『吉岡の日記』の内容を丁寧に捉えていくことである。私たち「吉岡の日記」を読むグループは、昨年度（二〇一八年度）の先輩方の翻刻・調査—文化元年（一八〇四）旧暦九月二十六日～十月四日—を引き継ぎ、旧暦十月五日から十月十九日までの内容を翻刻した。翻刻や内容の読解にあたっては、すでに本書の翻刻を公刊している鳥取市歴史博物館編『姫君姉妹 吉岡温泉滞在日記』に多大な学恩をこうむった。また、吉岡温泉の歴史では小泉友賢の著した『吉岡温泉記』（宝泉寺蔵）を用いて『吉岡の日記』と比較、検討した。

『吉岡の日記』とは

まずはじめに、本調査の対象である『吉岡の日記』について述べる。この作品は、著者である鷺見休明が、姫君姉妹の湯治に随伴し、鳥取の吉岡まで訪れた際の日記である。上下巻から構成されており、主な登場人物は、六代鳥取藩主・池田治道の娘の三津姫と庸姫、姫君たちの兄で七代藩主である斉邦、女房たち、そして筆者の鷺見である。この日記は、姫君たちの旅先の宿りでのお慰めのために、またのちに思い出しになる際のもてあそびの一種として、書き記されて献上されたものである。湯治が行われた時期は文化元年（一八〇四）の九月二十六日～十月二十八日（上巻）で、日記には、姫君たちの湯治の様子や、登場人物たちが詠んだ歌、著者の鷺見休明の政治観など幅広い内容が見られる。

著者の鷺見休明（一七五〇～一八〇八）についても触れておく。鷺見は鳥取藩士で、若年から漢学を学び、歌学は両親から手ほどきを受ける。江戸の著名人とも親交を重ねた。和歌に秀で筆跡も巧みで、多数の著書を残した人物である。

二、翻刻とは

次に、翻刻について説明したい。翻刻とは、崩し字を現代使われている仮名に直していく作業である。図一では「の」という文字を例に挙げる。赤線で示す箇所が普段なじみのある「の」の崩し字である。一方、青線で示す箇所が『吉岡の日記』

では比較的良好に使われていた字である。赤線部分の字母が「乃」であるのに対し、青線部分の字母は「能」である。このように同じひらがなでも字母は異なることが分かる。

図一 「の」の崩し字（『実用変体かな』より。以下、図五まで同様）

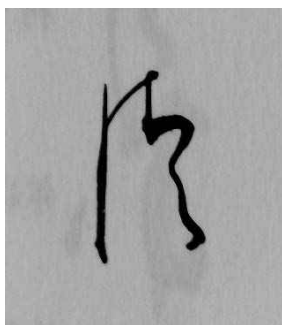


「の」の他にも現代で使われている仮名とは異なる字母を持つものもある。ここでは『吉岡の日記』原文で比較的良好に登場した仮名を二つ紹介する。一つ目は「つ」という仮名である（図二、図三参照）。現代で使われている「つ」の字母は「川」という漢字であるが、原文でよく登場する「つ」の字母は「徒」という漢字である。

図二 字母「川」

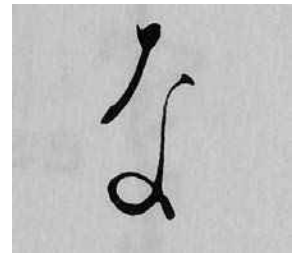


図三 字母「徒」



二つ目は「な」という仮名である（図四、図五参照）。現代で使われている「な」の字母は「奈」という漢字であるが、原文でよく登場する「な」の字母は「那」という漢字である。

図四 字母「奈」



図五 字母「那」



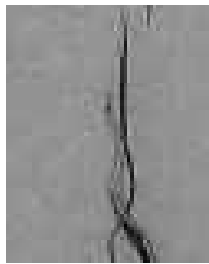
三、翻刻の訂正

本文の翻刻をする過程で改善した事例を、紙幅の都合で二点に絞って掲げる。
『吉岡温泉滞在日記』では図六の箇所を「しぐるゝ空も」と翻刻しているが（文化元年十月六日条）、私たちは「しぐるゝ空も」と改めた。図六と本文中の「し」と翻刻されている崩し字の図七を比べると、図六は縦に短いことがわかる。また、「しぐるゝ」は「しぐれてゐる」という意味になり、それに続く語は「窓」ではなくと考え、「空」としたところ、「しぐれてゐる空」となる。その後「けさは晴けり」と続き、「しぐれていた空も今朝は晴れた。」という意味になる。

図六 「しぐるゝ空も」



図七 「し」



次に、『吉岡温泉滞在日記』で図八の「悪病悉除（あくびょうしつじょ）」と翻刻されている箇所（文化元年十月十三日条）の中の「悪（あく）」を「衆（しゅう）」に改めた。すなわち、「衆病悉除」と翻刻した。「悪」の字の振り仮名をよく見ると、「しう」であることがわかる。ここは、『仏説薬師瑠璃光如来本願功德経』中の菩

薩の十二の大願の中にみられる「衆病悉得除」という語に基づいていると考えられる。

図八 「しうびやうしつじょ」



四、『吉岡の日記』内容読解

この節では、私たちが日記の中で特に注目した部分について読解してゆく。まずは、十月六日の記事である。

四―一 十月六日―晴れよかし―

※この前日の十月五日の条に、雨に降り込められる姫君たちを案じて家臣の詠んだ、「はれよかし 雨降くらす 山里は うきものとみ おほしわらん」（晴れてくれよ。雨が降り暮らす山里は うきものとみ おほしわらん）が記載されている。

（本文）

朝より雲のひま見えて、ほどなう日かげさしたる。いとうれし。「晴よかし」の歌、御覧じて、よみ給ひしとて、
いのりつる 人のことは しるしありて しぐるゝ空も、 けさは晴けり
祈りてし 深き心を かきくもり しぐれしそらの はるゝにぞしる
と書き給ふて、賜ひける。置どころなからん、御そばの人よりも、おなじ心を
よめるとて、添ておくられけるうた。

晴なむと 祈るまことの かひありて 天津日かげの けふはさしけり

(現代語訳)

朝から雲の隙間が見えて、ほどなくして日の光が差ししてくる。とても喜ばしい。(姫様方が)「晴れよかし」の歌をご覧になり、お詠みになったということで、祈っていた人の言葉の甲斐があつて、しぐれていた空も今朝は晴れたことよ。晴れを祈っていた深い心のほどを、かき曇りしぐれていた空が晴れたことでよく分かった。

とお書きになって、「晴れよかし」の歌を詠んだ者に) お与えになった。(その者は、ありがたいものをいただき)置く場所がないだろう。お傍の人からも、同じ気持ちで和歌を詠むということで、添えて贈られた歌(は次のようなものである)。

きつと晴れるだろうと祈る誠意の甲斐あつて、天の日光が今日は射したなあ。

この箇所は、前日まで降り続いていた雨がやんだ場面である。冒頭に示したように、家臣は姫君に対して「はれよかし」の歌を詠んでいた。この日、姫君はその歌を御覧になり、歌を詠んだ者に対して返歌を送った。これらの内容から分かるように、姫君は家臣の姫君に対する想いをきちんと汲み取り、家臣が姫君を想って詠んだ歌に返歌を送っているのである。

このような姫君の行動から、姫君の家臣を想って行動する、優しい心や思いやりを見てとることができる。

四―二 十月六日―姫君たちの遊び―

(本文)

……御姉なる姫君、すこしあつしくおはしますと、きのふくすしのいひしを、き、しより、いと心やすからぬを、けふは、御名残なくおこたり給ふて、ふみ画など、めてもてあそび給ひ、①からうた書たる、かるたといふものを、御みづからも、あはし給ふて、②御さえくしく、わたり給ふを、見奉るぞ、よろこばしといふも、また類ひあらじかし。

星きら／＼と、夕月のかげ、ほのめきたる気色、此ほどにさまかはりて、めづらし、夜半過るころより、又雨風きほふ。

降ぬべき 時の雨をば いかゞせん ひるまをだにも よきよとぞおもふ

(現代語訳)

御姉の姫君がわずかにお熱がおありになると昨日医者が言ったのを聞いてから、(我々は)とても心配していたのだが、今日になると(姫君は)あますことなく快復なさつて、書画などを鑑賞してお楽しみなさり、①漢詩の書いてあるカルタというものを御自らもなさる。②実に学識深くいらつしやる様子を拝見するにつけても、喜ばしさは無類なことであるよ。

星が輝き、夕月の光がかすかに見えている様子は、近ごろ(の天気)と様子が変わって素晴らしい。夜中を過ぎるころから、また雨と風が先を争うような天気となる。

(十月なのだから) 降るはずの時雨は仕方がない。昼間だけでも止んでくれと思う。

この場面は、三津姫の病状がよくなつて、書画を鑑賞して楽しんだり、漢詩の書かれたカルタをなさっている様子や、再び天候が悪くなった様子が描写されている。特に傍線部①と②について注目した。

傍線部①では、姫君が自ら、漢詩の書かれたカルタをなさっている様子が見て取ることが出来る。

また、傍線部の②「御さえくしく」という言葉に注目したい。この「御さえくしく」には、「さえええくしく」、「ええええくしく」という二つの解釈の可能性がある。「さえええくしく」は活気があるという訳で、「ええええくしく」は学識が深い、秀でているという訳である。この時代は、基本的に漢詩は男性の教養として認識されており、そのうえ、傍線部①から分かるように、姫君は自ら漢詩の書いてあるカルタで遊んでいる。そこで、私たちは、この場面を姫様の学識を褒めたたえる文脈と判断し、「ええええくしく」と解釈して、「学識が深い、秀でている」と訳した。

これらの部分から、姫君の思いやりのある心だけではなく、姫君の学識深さについても読みとることが出来た。

四―三 十月八日―楽しみの本質―

(本文)

……よべは又雨の音せしが、けふは晴れたり。おまし所に、めづらしく、物の音きこゆ。聞なれぬ里人、み、かたふけぬは、あらじ。すべて、ものゝねには、その人さま、心ばえなども、おのづから、あらはるゝものなれば、外面ちかき、かりの御住ゐなれば、人々心づかひ、せられんかし。①賤しきものゝ心には、上つかたは、万のこと、おぼしめすまゝにて、楽しききはみならんと、おもふめるに、「夕顔だなの下涼み」(注一)、又は「とにもかくにもなりひさご」(注二)など、古も今も、うたふをきけば、たのしみのきはみは、下さまにこそあめれ。

(現代語訳)

昨夜はまた雨の音がしていたが、今日は晴れた。(姫君が) いらつしゃるところから、珍しく楽器の音が聞こえる。聞きなれない里の者たちの中に、耳を傾けないものはいないだろう。総じて、演奏の音にはその人柄や心遣いが自然と表れる者なので、外が近い旅の仮のお住まいであるため、(演奏する) 人々は、緊張してしまうだろうよ。①身分が低い者の心の中では、上流の方々は、なんでも思いのままに楽しみの限りを尽くしているのだろうと思っているようであるが、「夕顔棚の下涼み」または「とにもかくにもなりひさご」などと昔も今もうたっていることを聞けば、楽しみの限りは身分の低い者にこそあるようだ。

(注一)『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』(JapanKnowledge)に、「楽しみは夕顔棚の下涼み男はててら女は二布(ふたの)して」という歌が掲載され、「男はててら、女は二布の気楽な姿で夕顔棚の下に涼んでいる、これは実に楽しいことだ。」「ててら」はふんどし、「二布」は腰巻き。貧しさの中にも楽しみのあることをよんだ歌。木下長嘯子の歌ともいわれる。「諺語大辞典(1910)」という解説が付されている。ここで引かれているのも、この歌なのだろう。

(注二)未詳。「とにもかくにもなる」(どうとでもなる)と「なりひさご」(瓢箪)をかけたシャレのような文句が当時伝わっていたのではないかと推察される。

この場面では、滞在中の宿で姫君たちが楽器の演奏をさせて楽しんでいる。この箇所のポイントとなってくるのは傍線部①の部分である。本来であれば、この時代背景においては、驚見のような武士階級の立場の者が身分の違いに関する記述をすることは滅多にない。しかし、この文書が姫君が読むという前提の日記という作品であったため、和文を用いて例えなどを多く扱ってカジュアルな文体を作り上げ、武士階級の者の弱音にも近い内容の文章を書き記せたと考えられる。

この記述は以下のように続いている。

(本文)

②「すめば又、うき世なりけり。余所ながら、おもひしまゝの、山ざともがな」と、いへる歌のことく、よそながら思ふには、いとたのしげに、うらやましと、見ゆるさかひにも、入たちみれば、又くるしき事もまじるは、③あざなへる縄の、たとへも、さることにて、のがれぬふしなり。されば、④上も下も、しらぬさかひをのみ、うらやみのせむより、身を顧て心をやすくあらせんこそ、願はしけれ。

(現代語訳)

②「世を逃れて、いざ山里に住んでみると、ここもまた憂くつらいところであつたことだよ。出家以前から思い描いていた通りの山里があつたらなあ。」と(兼好法師が)詠んだ歌のように、外から思う分にはたいそう楽しそうで羨ましげに見える境遇にも、いざそこに入ってみると、苦しいことも交ざってくるのは、③あざなえる縄の例えもその通りなのであつて、(どのような境遇、身分でも)避けることのできない事柄なのである。それゆえ、④身分が高いものも低い者も、自分の知らない境遇ばかりを羨ましがると、わが身(の行い)を顧みて心安らかにいることこそ望ましいのである。

ここでは、傍線部②のような歌(『兼好法師集』/右の訳は丸山陽子『コレクション

ン日本歌人選 兼好法師』(二〇〇一、笠間書院)に拠る)や傍線部③のようなことわざを例として用いること、それまでに述べていた身分の違うもの同士の持つ互いの境遇に対する考えを記しておくことによって、傍線部④に記された彼の考えをより強く主張できる文章となっており、驚見なりの身分に対する強い考えが見受けられる。

五、現地調査

私たちは翻刻作業や文献調査のみではなく、『吉岡の日記』の舞台となった吉岡温泉町で調査を行った。実際に姫君たちが通ったとされる道を通ったが、天候は曇りだったので、姫君たちが見ていた景色と少しは近い景色が見られたように思われた。我々が最初に訪れたのは一ノ湯である(図九)。

図九 一ノ湯の看板



近年新たに改装、整備されていたようで、外観に古風な感じはなかった。江戸時代、鳥取藩主池田氏とその一族がたびたび訪れていたという温泉が今もこうして残っていることから、一ノ湯が吉岡の地でいかに大切に扱われてきたかを感じるこ

とができた。また、一ノ湯にある看板には吉岡温泉に一ノ湯、二ノ湯、御茶屋があることが説明されている(図十)。

一ノ湯は「亀井殿湯」を見た鳥取藩初代藩主の池田光仲が、自分専用に使わせた湯壺であると伝わっている。「亀井殿湯」というのは、関ヶ原の戦いのあと、この地の領主となった鹿野城主亀井茲矩が掘らせたためにそう呼ばれている。

図十 吉岡温泉会館一ノ湯にて撮影



次に我々が訪れたのは座光寺である(図十一)。



図十一 座光寺

実は、座光寺には姫君たちは訪れていない。座光寺は、次節の「吉岡温泉の由来の比較」で登場する菖蒲村の薬師如来に關係するお寺とされ、『吉岡の日記』では十月十三日の記事の欄外に朱筆で記載がある（「菖蒲村の薬師は京都にある因幡薬師也。薬師都へ飛去給ひて跡に、台座と後光と残りし故、其寺を座光寺と称し、今も菖蒲村にあり」）。座光寺の周辺にはあまり人影がなく、仏堂がただひっそりと佇んでいた。境内の周囲はきれいに清掃されていて、このお寺が地元の人々から大切にされていることがうかがえた。『吉岡の日記』で娘にお告げを与えた薬師如来の仏像はないかと中を覗いてみたが、隙間からは中の様子が見えづらく、特にそれらしきものは見ることはできなかった。

六、吉岡温泉の由来の比較

続いて私たちは『吉岡の日記』とその他の書物の内容を比較する作業を行った。今回、吉岡温泉の由来を比較するにあたって私たちが用いたのは、小泉友賢の著した『吉岡温泉記』という書物である。これは吉岡温泉町にある宝泉寺に所蔵されている書物で、延宝二年（一六七四）に執筆されたものだ。『吉岡温泉記』には吉岡温泉の由来についての記述があり、『吉岡の日記』と『吉岡温泉記』と、この二つの書物が記す温泉の由来の中に、共通点、相違点があることに気付いた私たちはこの事に関心を持ち詳しく調べた。

今回は紙幅の都合上、いくつか見つかった共通点、相違点の中から特に重要だと判断した四つの相違点について紹介したいと思う。

◇『吉岡の日記』 十月十三日の条より

①人皇六十七代、三条院の御宇、長和の比、此所に②刑部某といふ長者あり。其人ひとりの、娘ありて、寵愛しけるが、思ひよらず、悪瘡をうれひて、医療さまざま尽せど、せんなく、夫婦・娘もろともに、菖蒲村の薬師如来に参籠して、平癒せんやうを、祈けるに、七日にみつれど、何のしるしも、なかりければ、娘一首の歌をよみて奉る。

③南無薬師 衆病悉除の 願立て 身より仏の 名こそ惜けれ

あかつきすこしまどろみけるに、薬師如来夢のうちに、告たまはく、汝が田園のうちに古木の柳あり。其跡のもとに、霊仏一体埋れます、是をとり出しなば、其跡より神湯湧出すべし。其霊仏を尊敬し、其神湯にて、悪瘡を洗ふべしと。夫婦むすめ、奇異のおもひをなし、立歸りて、柳の古木を切倒し見れば、果して霊仏あり。其所より温泉湧出しかば、有難さ肝にめひじ、御告のま、にせしに、ほどなく平癒しぬ。④遠近の人、き、およびて、此温泉に浴して、しるしを得るもの、多かりければ、おのづから、かなたこなたより、寄あつまりて、家居などせしかば、寄岡といひけるを、いつの時よりか、吉岡と改りぬ。……

◇小泉友賢『吉岡温泉記』（宝泉寺蔵）より

或老翁のほのかに物語せしは、①往古いづれの時の事にや。②此所に一人の

長者あり、本より家富財ゆたかにして田園山林牛馬のたぐひ限なく、眷属親類富さかへ、奴婢男女数百人めしつかひ、さながら七珍萬寶にあきみたり。されども此長者夫婦かかる富貴榮花にも驕慢の心なく、天性心正直にして天道仏神を敬ひ尊び、冥慮をおそれ物を害する心なく他人の善をなすをばよろこび他人のうれひあるをばなげき、飢寒に及ぶものには多の衣食をほどこしあたへ、わびしき貧民には米穀をかしてもそのつぐのひをうくる事なし。かゝる善根をおこなひける天道のめぐみにや、家の内にぎわひて財寶日々にわくがごとし。

しかるに一人の息女あり。みめ姿うつくしく、心ざまやさしければ、父母の寵愛かぎりなし。然る処に、此娘年十二の比より面に悪瘡出悩しかは、こはいかにせんとなくとも、此瘡終にゆる事なく已に三年に及び、うるはしき姿も衰へ、命も危く見えければ、父母のなげきせむかたなく、さま／＼の良薬求め、医療を頼み治すれども、さらにも験のみゆる事なし。ここかしこの霊仏靈神にいのり丹誠をつくせども納受更にあらずれば、父母はうつし心なく十方にくれてあこがれしが、同郡古海の菖蒲村の薬師如来こそ天竺より飛来給ふ霊仏にて三国にわたり迷妄の衆生を救ひ給ふ慈悲深き仏なれば、是を偏に頼まんとて父母ともなひ七日の間参籠して五牀を地をなげ祈誓して朝暮礼拝恭敬せしに、

③七日に満せし夜不思議の示現をかふぶりけり。汝の娘の瘡は今世一世のくるしみにあらず、過去罪業の報なれば本復する事はかたけれども、汝の日比善心ありて慈悲を行じ人をすくひ施をなす善業たねとなれり。今又仏力を深く頼む恭敬の信心すてがたければ、我慈悲の神通力を以、所苦平癒を得さすべし。則汝が田園のうちうつる田といふ所に奇妙の神水わき出べし、それを汲瘡をあらへ、と新なる霊夢をかふぶり、喜事かぎりなく急立かへり其処へ行ければ、案のごとく田井のかたはら三尺ばかりの所、水いろかはり世にめづらしき神水なり。いそぎ爰をほりあげ注連をひき、きよめをなして此水を汲あぐれば、五色の光さしうつりあた、か成事わかせる湯に殊ならず。是を汲、娘にあたへ、苦む所をあらひしかは、七日が内に平癒して、其あともなく成にけり。(中略)

一とせ当太守光仲公この所へ御来儀あつて、この亀井湯を修造せられ、みづから入給ふ湯とさだめらる。抑此所は④むかしは刑部の里といひしとかや、たゞし、をさかべよしおか、昔はならび居ける郷ともいへり、いつのほど一所になりしにや。今はそのあと分明ならず。

上記には、『吉岡の日記』と『吉岡温泉記』を比較した際に出てきた相違点に該当する箇所が示してある(①から④の記述)。

一つ目の相違点は、時代の差異についてである。①の記述に着目すると、吉岡温泉の出湯の時期について『吉岡の日記』では人皇六十七代の三条院の治世であった長和、つまり一〇一二年から一〇一七年の頃との記載があるが、『吉岡温泉記』では「久しき昔物語では、いつの時代とも言い伝えられず、長者の名前も分らない」という内容の記述があり、明確な年代が書かれているわけではなかった。

二つ目の相違点は、長者に関する記述についてである。②の記述に着目すると『吉岡の日記』では、吉岡温泉の由来と関係のある長者夫婦の人物像について詳細な記述がされておらず、「刑部の某」と呼ばれていたことや、娘がおり可愛がっていたということしか記載されていない。しかし一方で『吉岡温泉記』内では、地位が高く財も多く所有していたが、それに驕ることはなく信心深く善行を行う長者の姿が描かれている。貧しい民には穀類を貸し与え、しかし、それに対する金銭を要求することはなかったという出来事から、その懐の深さも窺える。さらに娘の悪瘡が治った後、財産をはたいて薬師如来の堂塔を建てるなどのエピソードもあり、長者の仏に対する信仰の深さが強調されている。このように『吉岡温泉記』では長者についての記述が豊富にあることが分かる。

三つ目の相違点は悪瘡を患い苦しんでいた娘がとった薬師如来への態度についてである。『吉岡の日記』内での③の記述は、悪瘡を患った娘が詠んだ歌であり、娘とその両親の三名で病気が治るようあらゆる治療をし尽くしたがどうにもならず、三人そろって菖蒲村の山にこもり、薬師如来に参詣し、病気が治るよう祈禱したという記述がある。この歌は「薬師如来よ。あなたはかつて様々な病気がことごとく治るといふ大願をおこしたとのことですが、しかし私の病気は治りませんでした。私の体よりもむしろ、あなたの評判の方が残念に思われますわ」という内容であり、薬師如来に対し少し挑発的に聞こえる。対して『吉岡温泉記』では参籠して七日目の夜に思いがけない神仏のお告げを受けたとされている。この記述から、『吉岡温泉記』内で描かれている娘は受動的な態度であると読み取れる。

四つ目の相違点は「吉岡」の地名の由来について書かれている部分である。④の記述に着目すると、『吉岡の日記』では、長者の娘の悪瘡が治ったという評判を聞いた人々が集まり住んだことで「寄岡」と呼ばれ、月日が経って「吉岡」と呼ばれるようになったという説明が施されているのに対し、『吉岡温泉記』内の記述では

かつて刑部の里という地が吉岡の里の隣にあり、月日経って「吉岡」とひとまとめに呼ばれるようになったがその時期ははっきりと分らないという内容が説明されている。

このような記述の違いから『吉岡温泉記』と『吉岡の日記』に記されている温泉の由来は、あらずじは一致しつつも、別のバリエーションといえる。吉岡温泉の由来に関しては『吉岡の日記』執筆当時に、今よりもっと多くの伝説が存在していたと考えられよう。また『吉岡の日記』の記述では、娘が行動的で、温泉の湧出をユニークに描いており、総じて物語に躍動感を与える工夫が施されている。そのようなユニークな温泉の由来を記載している点でも、『吉岡の日記』の資料的価値は認められるだろう。

七、まとめ

最後に、今回、私たちが『吉岡の日記』の調査をしてきた上での、まとめを報告する。まず本文の調査から明らかになったことは、姫君の文学的リテラシーの高さや、家臣に気を配るといった思いやりのある心を有していることである。それは、男性の教養とされている、漢詩を使ったカルタを姫君自身が遊んでいることや、晴れることを祈る歌を詠んだ家臣へお与えになった「いのりつる」などの歌の内容からうかがうことができる。また、「夕顔棚の下涼み」や「とにもかくにもなりひさご」の表現などから、著者である鷺見休明は、身分の高い者から低い者に至るまで、人々の境遇に幅広く思いを馳せていたことがうかがえた。

さらに、『吉岡の日記』と『吉岡温泉記』から吉岡温泉の由来の比較をしたことで、様々な由来が存在する可能性や、『吉岡の日記』の物語のユニークさをうかがうことが出来た。

【参考・引用文献】

- ・鳥取市歴史博物館編（二〇〇四）『姫君姉妹 吉岡温泉滞在日記』
- ・かな研究会編（一九八八）『実用変体がな』、新典社
- ・鷺見休明『吉岡の日記 上巻』、鳥取県立図書館所蔵
- ・小泉友賢『吉岡温泉記』、宝泉寺所蔵